

人類社会は持続可能な社会に蘇生できるか－東南アジア漁村研究の視点から

外国語学研究科 地域研究専攻
辻 修次

要旨

経済成長と自然環境の調和が、先鋭的な問題とされてすでに久しく、多くの議論が積み上げられてきた。そのような議論中に、現在まで存続する一つの有力な思想的潮流がある。それは、「西欧近代」の延長にある現状を悪とし、きたるべき「環境と調和した社会」を善とする二項対立である。本論文では、人類社会が持続可能であるためには、このような二項対立ではなく、西欧近代の残した制度的な遺産である、労働法や会計監査制度などが積極評価されるべきであることを示す。新奇で急進的な思潮や手法を強調することではなく、何世代もかけて築かれてきた制度的遺産の活用が、人類社会が持続的社會として蘇生する重要な鍵だということこそ、筆者の最も主張したい点である。

この論文では、まず「持続可能な成長」の概念を検討し、続いて筆者自身の研究対象である東南アジアの漁民社会を例にとり、今後の人類社会、中でも途上国の農漁村の姿を検討してゆく。

伝統的な社会を含めあらゆる社会が固有の矛盾を内包している。伝統的な農漁村では、場合によって、歪な組織が生産を支えている。このため、たとえ環境の負荷伝統的な生産組織であっても、手放して賛美することは危険な保守性をはらんでいる。持続可能な社会を実現するには、途上国の伝統的農漁村も含め、社会の生産組織自体に変化を促すことが必要である。持続可能な社会論は、西洋近代国家による植民地化や自然破壊への批判を強める中で、多くの西洋の知的伝統自体に対して、大胆で根源的な批判を提出してきた。しかし、同じく西欧の伝統である財産権や社会権の保障や、性や出自によらない人権の保証などの価値は、「支える」(sus-tain)社会の側に目を向けるとき、却って擁護されるべきではなかろうか。

はじめに

経済成長と自然環境の調和が、先鋭的な問題とされてすでに久しい。先進工業国においては、工業化にともなう公害の発生や自動車による混雑などが1970年代すでに問題視され、ミシヤンの「経済成長の対価」や宇沢弘文の「自動車の社会的費用」などの著作が大きな知的インパクトを与えた。また、1992年のリオデジャネイロ会議以降、第三世界での天然資源問題に関心が集まった。「持続可能な成長」ということばが人々に広く知られるようになったのは、この時期のことだった。それ以後、多くの議論が積み上げられてきた。そのような議論中に、現在まで存続する一つの有力な思想的潮流がある。それは、「西欧近代」の延長にある現状を悪とし、きたるべき「環境と調和した社会」を善とする二項対立的な議論である。本論文では、人類社会が持続可能であるためには、このような二項対立ではなく、西欧近代の残した制度的な遺産である、労働法や会計監査制度などが積極評価されるべきであることを示す。新奇で急進的な思潮や手法を強調することではなく、何世代もかけて築かれてきた制度的遺産の活用が、人類社会が持続的社會として蘇生する重要な鍵だということこそ、筆者の最も主張したい点である。

以下では、まず「持続可能な成長」の概念を検討し、続いて筆者自身の研究対象である東南アジアの漁民社会を例にとり、今後の人類社会、中でも途上国の農漁村の姿を検討してゆく。

概念整理

「持続可能な成長」(sustainable development)は、現行の経済成長が環境への負荷や資源の枯渇から成果が相殺されるのに対して、現在の産業化の規模や速度を落としても、資源や環境への負荷を軽減すれば、長期的に見て安定した望ましい経済活動が行えるという視点にたっている。この議論の核には、天然資源が有限であり、また、ある自然環境が耐えうる負荷も有限であるため、資源が無限であると仮定した近代的な経済成長には限界があるという認識がある。また、持続可能な成長を議論することは、経済問題を議論することに留まらず次のような近代社会批判を内包していた。

1. 自然が人間に征服されるべき存在だと見なす西洋の知的伝統自体に対する批判
2. 既存の経済学が規模の拡大を重視し、環境への負荷を評価してこなかったことに対する批判
3. 現代の経済システムが、第三世界からの収奪を基盤にして成立していることへの批判

これらの批判に対して、以下のような対案が示された。

まず批判の1に対応して、自然は、人間の利用価値を基準に価値が決まるのではなく、それ自身が「自然の本質的な権利」を持っているとされた。また、生態系の思考にのっとり、生物間の相互作用に目を向け、生態系を全体として守ることが強く主張された。また、批判の2に対応して、自然の経済的な有用性評価が試みられ、汚染の回復費用を企業会計に組み込む手法が登場した。また、農地に化学肥料を投入した場合に、製造段階で投入されたエネルギーや、農業機械の燃料を算出し、エネルギー効率評価が試みられた。批判の3に対応する改革のための行動指針として、世代内の公平と世代間公平が主張された。前者は、先進工業国やエリートによる資源独占を、後者は、現在世代の浪費による将来世代の資源枯渇を、それぞれ避けることを指す。批判の3に対応する、より急進的な主張では、政治的資源の不均等も問題にされ、社会的弱者・女性の権利・利益を伸長し、男性・エリート・支配民族の政治的優位を覆すように社会制度を一変させることが重要だとされた。

では、これまでの議論を具体化するために、第三世界の農業形態に対して向けられた評価を例に検討してみよう。まず具体的に批判対象となった例を示せば、大量の飼料を使って輸出用の肉牛を育てる牧畜や、同一の作物だけを連作することで土壌を大きく疲弊させるプランテーションなどがあげられる。このような批判と対になって肯定的な評価が下されたものを挙げれば、それは、第三世界で古くから営まれて来た農業形態であった。たとえば、ア

マゾンの原住民が行う焼畑が何千年のスパンで原住民社会を支えてきたこと、中国の棚田での稲作は、畜糞などの有機的な肥料を使って行われる循環的なものであり、また畜力を活用することによって、化学肥料を大量に投下し、農業機械を多用する現代の先進工業国の農業よりも十倍近くエネルギー効率が良いことなどが紹介され、高い評価が下された。

こうした再評価の流れのうち、一部の急進的な主張では、西欧の倫理が人間による自然征服を許容したのに対して、インディオのアニミズムや、中国の道教や仏教が自然との調和を重んじたことと、農業形態のあり方を結び付け、「先住民の叡智」や「東洋の叡智」を賛美する方向に向かった。

だが、持続可能な成長論を支える重要な基準の一つである、分配の公正の観点からみれば、伝統賛美には危険な保守性がある。特に、このような伝統賛美が、時に先住民社会やアジア農村の社会を十分に分析せずに行われた場合にこの傾向が現われる。

このことを説明するために、まず **Sustain** という語を、ラテン語 **sustaior** の原義から検討すれば、それは何者かが背負うこと、重荷に耐えることであり、**sustainable** とは、その荷の重さが許容できる範囲であることを意味する。従って **sustainable Development** とは、発展の過程において、自然環境と人間社会のどちらにとっても負荷が許容可能な状態を指す。このうち、特に人間社会の側に注目すれば、地域社会が生産を下支えできる状態を保つこと、と定義することが最も原義を反映している。だが、前近代の社会において誰が生産を背負っていたのか。伝統的な生産組織には、農奴に近い小作人を酷使したり、女性の権利を圧殺するメカニズムを内包しているものが見られ、このため、伝統的な生産組織内部において人々は均等に重荷を追っているのではない。そのために、伝統的な生産組織が、環境に負荷をかけなかったことと、組織内部に固有の矛盾や対立がないことは別個の問題である。筆者が危惧するのは、西欧近代批判の論調では、この事実がともすれば忘れられていることである。

東南アジア漁村社会

ここでは、伝統的な生産組織の例として、筆者自身の研究対象である東南アジアの漁村社会を検証しよう。漁民は、世界の多くの地域で国内の底辺層におかれている。東南アジアもその例外ではない。一般に、漁村には、船や漁具を所有する上層の漁民と、これらを持たない下層漁民がおり、下層漁民の生活水準は非常に低い。

東南アジア漁村内の経済活動を見ると、船主は、漁獲の一定の割合を資本の取り分として受け取っている。また、東南アジアの漁村には、「ミドルマン」と呼ばれる水産仲買人がおり、このような水産仲買人は殆どの場合、船主を兼ねている。彼らは、消費者と漁民を繋ぐ流通業者であり、また、信用供給が乏しい漁村に対して、資本を提供する数少ない存在として漁村経済の死活的な役割を担っている。この漁村経済の内部では、水産仲買人は、漁民との水産物取り引きを独占し、また漁民への消費財の供給も行っている。こ

の過程で、水産物の生産者価格を低め、また消費財を高い値で売ることによって、仲買人が高い収益を上げていることが、漁民の貧困の理由の一つとされてきた。また、船主漁民間の分配比率が極めて不適切なのではないかという議論もなされてきた。さらに、このような漁民に厳しい条件の取り引きは、漁民が仲買人から生活資本を借り入れた場合、彼の所有する漁船に労働力を提供したり、借り入れをした仲買人とだけ水産物の取り引きを行うことが義務づけられることで、さらに強まることが知られている。そして漁民の労働形態は不透明で、不法入国者や児童などが安価な労働力として用いられる場合も少なくない。

他方、東南アジアに限らず、漁業と生物資源の利用については、これまで多くの議論が積み重ねられてきた。その中の悲観的なシナリオは、「共有地の悲劇」論を下敷きに、海洋漁業が生物資源を枯渇させるプロセスを説明してきた。農地とことなり、特定の所有者がいない海洋や原野では、それぞれの漁民がより多くの漁獲を上げようと行動する。資源が少なくなれば、希少な資源をめぐる競争が熾烈になるばかりで、資源管理はなされずに資源の枯渇を加速していく、というのが、その概要である。タイのシャム湾では、事態は、この通りに進行した。シャム湾は非常に豊富な漁業資源に恵まれていた。また、タイは第三世界諸国の中では、比較的順調な経済成長に成功した国であり、1960年代から漁船を大型化し、大規模なトロール漁業が行われ、漁民の所得は一時的に高まった。しかし、乱獲によって漁場が劣化するにつれ、まさに共有地の悲劇論が描いた通り、漁民は操業日数を伸ばしたり、トロール漁具にさらに多額の資本を投じた。結果的にシャム湾漁場は壊滅的な打撃を受け、漁民はかつてより困窮を深めただけであった。

環境への負荷を軽減するには、漁民が過剰な漁獲努力を強いられてはならない。そのためには、漁民の経済状態を改善し、貧困を解消、あるいは削減することが必要となる。その手段には、いくつかの選択肢がありうる。これまで取られてきた最も一般的な手段は、漁具や漁船の性能を高め、労働生産性を向上させることだった。だが、これは言い換えれば、一網の魚をどう分配するかには手をつけず、一網の量を増やすことである。したがって、この手段は漁場への負荷を高めることにも繋がる。もし環境への負荷を考慮するならば、より望ましい手段は、一網の魚の分配をより透明で公正なものにすることである。

しかしながら、これにも急進的な手段と、穏健的な手段がある。急進的な手段の例は、メキシコでかつて行われた農地改革のように、強権を発動して持てる者の財産を接収して持たざるものに再分配することであり、漁村の文脈では、水産仲買人を強硬に排除し、漁民に船を無償で与えたり国家が流通を行うことを指す。穏健的な手段の例は、水産仲買人に対する会計監査の徹底や、漁民の労働契約を成文化された正規の労働法に組み入れることによって、生産者への分配を公正にし、あるいは漁民の権利を保護することである。一般的に手段が急進的になればなるほど、その状態が「持続可能」であることは難しい。なぜなら、急進的な土地の再分配の怨恨がその後、長期的な社会対立を招いたように、大きな反作用を伴うからである。

付加えれば、一網の分配変更以外にも手段は提示されている。たとえば、マレーシア国民大学のハジ=オマール教授は、マレーシア政府に対して、漁家の家計を総合的に見て収入を増加させることが重要であると勧告し、これには、伝統的に現金収入に繋がりにくかった女性の労働を見直すなど、家長や成人した男子による漁業労働への依存度を下げることが提言されていた。

総括

以上を総括すると、以下のようなことがいえる。伝統的な社会を含めあらゆる社会が固有の矛盾を内包している。伝統的な農漁村では、場合によって、歪な組織が生産を支えている。しかし、発展の戦略として、技術と生産性を高める戦略だけをとれば、それは自然環境にとっての負荷を高め、かつ、地域の間人集団の否定的な面をも温存する結果となる。しかし、たとえ環境の負荷伝統的な生産組織であっても、手放して賛美することは危険な保守性をはらんでいる。持続可能な社会を実現するには、途上国の伝統的農漁村も含め、社会の生産組織自体に変化を促すことが必要である。だが、その手段は穏健なものが、長期的な持続性の観点から望ましい。筆者が考える、そうした長期的持続性を持つ穏健な手段とは、労働法や会計監査制度など、西欧の制度的遺産の踏襲である。

持続可能な社会論は、西洋近代国家による植民地化や自然破壊への批判を強める中で、アリストテレス以来の人間中心の自然観や、デカルト的な自然現象の細部の分析を中心とする科学のあり方、古典派経済学的な、資源が無限であるという仮定の下での、主体の効用最大化の論理、マルクス主義的な進歩史観など、多くの西洋の知的伝統に対して、大胆で根源的な批判を提出してきた。しかしながら、そのような議論の一部は、「西洋」や「近代」と「東洋」や「伝統」を二元論的に整理し、前者を否定することに終わっていた観がある。しかし、同じく西欧の伝統である財産権や社会権の保障や、性や出自によらない人権の保証などの価値は、「支える」(sustainable)社会の側に目を向けるとき、却って擁護されるべきではなかろうか。そして、このような制度の基盤にある、普遍的人権を重んじる西欧近代の倫理観もまた、堅持するべきではなかろうか。人類社会が持続可能な社会に蘇生するための鍵が隠されているのは、この世界のどこにも存在しない黄金郷や聖賢の国ではない。

